水よりも沼を

安倉儀たたた

水よりも沼を

安倉儀たたた

孤独は沈み込む沼のようなもので、ともすればそこで泳げと誰かが言ってくる。

　自分の名前が数秒間思い出せない朝だったから、昨日はきっと飲みすぎていたに違いない。月曜日と火曜日の次はなん曜日だったっけ。
　「馬鹿げているなぁ」と歯磨きしてると、ニャオンが言ってきた。
　ニャオンは猫の癖に、黒いし、しゃべるし、毛並みがいいし、なんか上品だし、心を読んでニヤニヤしながらなんかいってくるからどうしても好きになれない。
　「あ、おまえ今俺のこと嫌いになったろ」
　目の前にすたん、と降りて、ニャオンはくしくしと笑う。僕は「別に」といってからカレンダーを見た。二〇〇九年。あ、去年で止まってる。今年のカレンダーはないんだった。
　ニャオンは狭いワンルームをあちこち、うろうろとうろつきながら「君ががんばってたのは、その頃だったんだよ。ニャオン」なんて言ってる。二〇〇九年の努力は、二〇一二年には持ち越されなかったんだ。
　ぼくはその言いぐさにちょっとむっとして、ニャオンを抱きかかえた。柔らかくって、ちょっと毛が長くてもふもふした体をぐにゃぐにゃといじくると、ニャオンは「わあああ」って言いいながらなんだか気持ちよさそうにごろごろと動く。
　昼ご飯を食べて本屋をのぞいて、公園にいき、ブランコに座ってコーラを飲んだ。「甘い味がするものがすきだよね、君は」とニャオンは僕の隣で、毛繕いをしながらぼやくのだけど、それが嫌みにならないのがニャオンらしい。
　ニャオンはいつも、唐突にそこにくる。「ツイッターのつぶやきみたいなもんだよね」とニャオンにいってやる。お前の言葉なんて、用もないのに流れて言葉だから、聞かない。ニャオンはくしくしと笑って、こういう時は僕のこころを読んでいる時間に違いない。
　それでも、ニャオンは何も言わなかった。
　夕方になってから、アルバイト先で魚を殺し、深夜になって家に帰ってきた。疲労のせいか、いつもより重たいドアをぎいと開けるともう明かりは付いていた。
　「おかえりなさい」
　ただいまは言わない。
　彼女は名前を由佳といった。初めてあったときは、村山由佳の由佳だよ、といって淡い栗色の髪の毛をふさふさと揺らしたんだった。ボブ・ディランと65デイズオブスタティックが詰まっ

たCDラックに腰掛けながら、今は僕のパジャマを着ている。もしかしたら、僕はそのとき警戒の表情を浮かべていたのかもしれない。由佳は肉感的な肌色を、前のめりに、かがみ込むように僕をのぞき込んでいた。ニャオンが退屈そうにあくびをした。

「なんの用、なの‥‥？」

「という言葉を僕がいえないのはこういうことだ。あ、もしかしたらこの子は何か勘違いしていて、僕の部屋から何事もなかったかのように出て行ってしまうのではないか。僕なんかどうでもいいや、とかいって。でもでも。でも僕はそれとは別に、あー、この子いい匂いするなぁどうして女の子はいい匂いするんだろうなあやらせてくれないかなあなーんてね？　それにしても西武新宿線はどうして夜あんなにこむんだろう。雑念よ払え。それにしてもいい匂いがするいい匂いがする女の子はどうしていい匂いがするのだろう。以下略」

僕の話を遮って、うるさく続けていたニャオンにチョップをすると、いて、と舌を出しながら、ニャオンはいてえよおって言う。それをみて由佳はアハハっと笑って、「君って面白いね〜、おもしろいところはずっとかわんないね〜」とかなんとか言って、ひとしきり笑ってテレビをつけた。僕もつられて引きつった笑みを浮かべたのかもしれない。それで、ああ、もしかしたらこういうのもリアリズムっていうのかもしれないなと思った。

由佳が僕の家にいきついた理由は、僕だけが知っていればいいと思う。彼女が家に来てから『竹取物語』の話をしたような気がする。あと、チベットの音楽の話と、パリサイ人の吝嗇について。それと、ゴダールの映画の意味深なセリフ回しと、テロリズムについて。　もう一つは、ナルトの正しい食べ方。ニャオンはいつもニヤニヤしていて、僕は由佳をわりとあっさり受け入れていた。深夜に包丁をもってそばに立っていない限りは、僕の家にいることを許そうと思っていたのだった。

だから、その間はちょっと楽しかった。「楽しかったんだよね」とニャオンも一日の終りに、それが生きることの慶びであるかのような口ぶりで僕に尋ねてきた。僕は何も言わなかったけれど、ニャオンはニヤニヤとそれを受け入れた。

＊＊＊

由佳はよく幻覚をみた。「何が見える？」って聞くと、すぐにいろんな答えを返してくれた。鳳凰が飛び回る青空の下で、石炭のつまったバオバブの木々が燃えていて、その木々の間をパチンコ玉がすごい勢いで行き来する様子をヘリコプターで見ていると、ゴジラみたいな怪獣が青空のほうに吸い込まれていく様子とか、蛇が蛇を飲み込んで、その蛇の横っ腹から猫が生えだして、その猫を起点に世界中のお札が生え始めるんだけど、それは宇宙の空気がないところに生える木々だから、私はそれをとれなくて、すごい拷問を受けながら血まみれの全身と膣液を垂れ流しながらお金がほしいってずっといってる様子とか。彼女の心はいろんな害悪や優しさに包まれて、僕が心の最小公倍数だと思っている原子よりももっと粉々に壊れていたのだ。由佳は家で狂ったように内職をしていて、毎日送られてくる組み立て前のボールペンは一つとして同じもののない宝具のように見えたのだといった。でもそんなのは間違いなく嘘だ。

三週間後に、彼女はちょっとしたいたずらを仕掛けた。僕と一緒に『ウッチャンナンチャンの

やるならやらねば』のDVDを見ている最中に、気持ち悪くなったのでトイレにいってくるといって嘔吐した振りをして、悲しそうなそれでいて嬉しそうな表情を浮かべて　「できちゃったの」とつぶやいたのだった。僕は沈黙していた。

　反応したのはニャオンで、しっぽを硬直した銅像のように屹立させ、あらん限りの絶叫で「嘘だ！」と叫んだ。嘘だ。嘘だ。嘘だ。永遠に続くかと思われたその言葉をやめさせるためには、僕はニャオンの頭にホロコーストの本が詰め込まれた本棚をおとさなければならなかったんだった。泣きじゃくる由佳に対して、魚と一緒なんだよ、と濡れた雑巾で床をふきながら僕はひとりごちた。魚と一緒なんだ。最後に切り身になるか、あるいは捨てられるか、記録されるか、記憶になるか、でなければこうしてなかったこと。その一つ一つの違いは大きいけれど、その大小は誰かが引き受けたり切り分けたりはできないんだ。

　「子供が嫌いなの？」

　「子供だったことがないんだ。好きとか嫌いとか、そういう話とは少し違っていて、だから単純に分からない。分からないことだから······」

　続きのことばは、ものすごく考えなければ浮かんでこなかった。セキズイハンシャの不足だ、ニャオンならそういったかもしれない。でも、もうニャオンはそういう言葉を使える存在ではない。僕らは、言葉や、言葉の意味にたいする理解が足りない。ニャオンを埋めると、僕はニャオンについて由佳に少しだけお話をした。「ニャオンはおじいちゃんからもらったんだ。おじいちゃんが生まれる前からいて、去年生まれて百年がたったから、話せるようになったんだって」

　由佳は部屋にもどると僕を押し倒した。彼女の目が、血と涙で赤く燃えていて、獣のようだと思った。このあと、この人は僕と体の関係を結ぶつもりなのだと妙に納得したけれど、彼女の体はぱっとみよりもずっと大きくて驚くほど硬くて、筋肉の間に緊張が電流のように走っていた。だから少し触るごとに硬直した死体が走るようにぴくりと体が動いて、それを見る度に僕はちりちりと呼吸が乱れた。面白がるよりも、唐突な脈動の合間に彼女の四肢が脈絡なくもげてしまうような幻覚を覚えて、そんな風にバラバラにならないように、僕は由佳の体をずっと抱きしめていなければいけなかった。いつの間にか二人の意識が消えて、すごく長い時間寝ていたような気がするけれど、二時間しか経っていなくて、体中に後悔のような重みが残っていて、すごく眠たい興奮の中で、由佳もいつのまにか目を覚ましていた。頬がまだ赤くて、呼吸の合間に咳き込んで水をほしがったから、口移しで飲ませてあげなければいけなかった。彼女は水を飲むと、僕の口内に舌をいれた。僕の唾液まで飲み干すと、由佳は寂しそうに聞いた。

　「なにか、良い話をして」

僕の頭をくしゃりと撫でて催促する。僕は少し考えて、中国にいた笑い男の話をした。笑い男は幼い頃に残酷な罪と罰の連鎖のどこかに、歯車に回る塵のように紛れ込んで、笑っている以外の表情を浮かべることができなくなったのだった。具体的には拷問をうけたのだった。笑い男はだから復讐に生涯の全てを費やし、その費やされた復讐の合間に、人生を楽しむことに決めた。そのような慶びの一つが、他者から見られないように笑いの顔をじいっと貼り付けたままにすることだった。これは成功した。笑い男と出会った人は、死ぬにせよ死ななかったにせよ、笑い男の笑い顔以外を見ることはなかったのだ。笑い男の慶びはもう一つあった。それは他者をみることだった。つまり、読書だったのだ。

笑い男が好んだ話は、少年たちの物語だった。野球に打ち込む少年たちの中に、女性が入ってきたことで調和が見出されたと信じる子どもたちの物語だったり、あるいはお祭りが終わった時に５シリングをもってやってきた遅れてきた子供の話だったりした。いづれにしても、その生活のどれひとつとして笑い男が手に入れることはできないものだった。

だからよく笑い男は本を読んで泣いた。生物分類学の本を読み、自分が人間の中に分類されることに泣いた。数学の本をよみ数理とは結局何もわからないことだと知って泣いた。小説をよみ、その小説に書かれている人物がこの世界のだれにも合致しないことに涙を流した。けれども、それは究極的に全部自分勝手な涙だったのだ。

「笑い男はかわいそうなの、そうではないの？」と由佳は僕の首筋をゆっくりと両手で締め付けながら聞いてきた。僕はかすれ声で「かわいそうな人だったと思うけれど、彼は彼をかわいそうだと思う人達以上に、かわいそうな人たちを探す能力に長けていたんだ」と答えた。

日曜日が終わりそうな時間だった。首をしめつける由佳のはだけた胸の間に深い深い傷があるのを見つけた。皮膚についた傷を少しなでれば、肋骨が見えてしまいそうな傷で、彼女の少しだけ焼けた肌色のなかに、深い赤茶けた血の痕跡を残していた。由佳はそれを梅田さんにつけられたものだといった。でも「いじめや暴力ではないの」と嬉しさのゆがんだ表情でいった。「手術みたいなものだった」「ごめん」「あやまらないで」「ごめん」　「じゃあ、懺悔して」

ニャオンはいま、土の下にいる。「できないから、もう少しだけ笑い男の話をさせてほしい」

「復讐に燃える笑い男は、自らと他者に二つの教訓を与えた。一つは、他罰的にならないこと。もう一つは、笑い男は、冷たくても、冷たくなくても、神としてそこにいようとした」

僕は途中から、泣き始めた。泣きはじめて、ニャオンが僕には必要だった理由に唐突な合点があって、ニャオンはようするに僕にとってのボヤキの装置。ツイッターのようなものだったんだってわかった。ニャオンのいない世界では独り言すらつぶやけない。

由佳は笑いながら、でもそれは泣きながらと等しい意味で、僕につばを吐きかけた。彼女は僕が僕のせいで傷つけたとある女性の恋人だということがわかった。いかに自分がその女性を愛していたか、どんなふうに体の関係を取り結び、僕を妙な方法と感情で憎んでいたのか、言葉足らずの断片をつなぎあわせて、僕に語った。透明な水晶の部屋の中で、出口を探すような、心細さの中で、それがどんな気持ちなのかをせつせつと語るのだった。水の中に泳ぐようなことができなくて、沼の孤独の中で生きていけない絶望について語っていった。

　僕は彼女を払いのける力もなくて、月曜日の次の火曜日のことや、火曜日の次の水曜日のことが絵のように過ぎ去っていくのを見ていた。それから彼女が妊娠に関することや、射精に関する許可を僕に与えて、口づけをした。暴力のようなくちづけだった。
そして僕は呼吸がとめられて、脳髄の天頂にまで血液や意識が後退するしびれを感じた。
　由佳はそれから、しばらく梅田さんのことを話してくれた。梅田さんのことは名前だけずっと聞いていて、由佳は彼との間にあるいろんな距離感のとりかたやその難しさについて語ってくれた。僕も梅田さんに会いたいなって由佳にいったら、もう会えないよっていう。
「だって死んじゃったもん」
「そっか」

＊＊＊

　僕が魚を殺すアルバイトから帰ってくると、土の下からニャオンが「今日はどうだったよ」って聞いてきた。「鰺をたくさん殺したよ。みんな嬉しそうだった」なんて会話をした。「そろそろ次のニャオンを探したらどーだい？」なんて、ちょっと楽しそうにいうからむっとして、僕は「僕の君は、君だけだ」って強く言った。
　言っといてなんだけど、意味わかんないや。
　部屋にもどって由佳と少し体を重ねてから、二人で旅行に行こうねって話をした。でもそんなことはできっこないのだ。僕は大きな病気にかかり人生で積み立てた最後のお金をふりしぼって退院してから、由佳に三度ほどあった。なんとなく、何もかもがあったようななかったようなことになっていて、彼女はまだ沼の中にいる。
　「僕はでも、水よりも沼のなかにいたい」
　と言った。
　「どうして？」
　不安がって。理由か。理由とかで答えられることじゃない気もする。
　「冷たくても、冷たくなくても、神はそこにいるから？」
　答えは彼女が疑問の形で述べた。僕はその言葉を反芻して、頷いた。
　「たぶん、泳ぐよりも溺れたいときには、人は水よりも沼にいくものだから、だから」
　「私がもう浮かび上がれることができなくなったら、あなたは一緒に溺れてくれる？」　と由佳に問われて、僕は数秒迷う。
　「水や沼よりも、もっといい場所があるはずだから、そういう場所で空気の味を美味しいと言えたらいいんじゃないかな。」と僕は答えて、曖昧なことを述べた罰を、ニャオンとは違うニヤニヤの笑みで誰かが返してくれたらいい。